

社ナビ、職ナビ、産ナビ

芝浦工業大学工学部建築工学科教授
藤澤好一

新学期がはじまって一月近くになるのに卒研ゼミのメンバー全員の顔がなかなか揃わない。新4年生たちはシューカツに追われているからだ。シューカツというのは就活、つまり就職活動のことだ。いかにも若者ことばらしい軽快な響きをもっているが、実態は年々厳しさを増している。せめて表現だけでも軽やかにという気持ちも働いているのだろう。

だが、厳密に言えば、就職ではなく就社のための活動なのだ。春休みからゴールデンウィークをはさんで企業訪問、会社説明会でスケジュールはびっしり。スーツと手帳はこの頃から彼らの必需品になっている。スケジュールは先方次第で突然変更になる。「明日のゼミなのですが、〇〇住宅の最終面接が入ってしまって、出席できなくなりました。すみません」とメールを送ってきたりする。少ない時は数人、ともすれば半数近くが出てこないゼミの日もある。これが6月ごろまでは続く。

多いのになると40社、50社と訪問する学生もいる。こうなるとさすがにシューカツという雰囲気ではなくなる。建設産業は間口も広いが、奥行きも相当な深さだということが見えてくるのだろう。自分がやりたい仕事、思い描いてきた職場とは違う現実を知る。手当たり次第に訪問してきた自分を客観的に見るようになる。職につくための一種の通過儀礼ともいえるものだが、もっと早いうちに体験できないものだろうか、とつねづね思っている。

それも実体験がいい。その一つはインターンシップだろう。しかし、何回もやれることではないし、当たり外れもある。せめてそれ以前の予備的な情報はつかませておきたい。となるとインターネットだろう。いまや学生たちにとって就活のためのもっとも強力な情報収集手段となっている。多くの企業がホームページに「採用情報」のページを開いているが、興味を抱かせるコンテンツが盛りだくさんだ。もっと早いうちに訪れてくれれば視野も広がり、やりたいことも見つかるのにと思っている。私自身は、ゼネコン、サブコン、業界団体などのホームページを集めたフォルダを「お気に入り」に用意し、大いに活用している。とくに画像のある建設過程の資料は講義などで引用、紹介している。鹿島建設の「動物たちの土木建築学」や「建設博物誌」、竹中工務店の「大工道具考」や「世界のドームの歴史」などは、優れた図解資料だ。

ただ残念なのは、ゼネコン各社のコンテンツでつくる現場を支えている専門工事業や技能職のことをほとんど扱っていないことだ。最近では、この分野へ関心を寄せる学生も少なくない。学生ばかりではない、子どもたちや社会が現場の仕事に魅力や親しみを感じ、知りたがっている。建設産業の基本のキホンは現場の仕事とその担い手。

最近になってようやく、(財)建設産業教育センターのホームページで建設マスターの職種紹介(<http://www.c-iec.or.jp/master/master06.html>)がはじまった。43種の職業のナビゲーションだが、個々には見えるようになったが、欲をいえば現場や産業、社会にとってどのような役割を担っているのか、もう一工夫がほしいところだ。そうすると産業自らが採りあげるべきものかもしれない。少なくとも海外では産業団体が最も力を入れている対象の一つだ。

その例を一つだけ紹介しておこう。アメリカのゼネコン団体AGCのホームページからその様子（図-http://www.agc.org/EducationTraining/on_site_classroom.asp）がうかがえる。建設産業の仕事の理解を学校教育の中で採り入れてもらうのに積極的で、教材の提供やインストラクターの教育にも力が入っている。

（社）建設産業専門団体連合会のホームページには、ぜひとも広く社会へ向けた親しみのもてる職ナビ、産ナビを期待したい。

